

川越祭りと浅草木馬亭

右城 猛

埼玉の川越祭り

埼玉県の川越祭は、川越氷川(ひかわ)神社の祭りで、関東三大祭の一つである。360年の歴史を誇るこの祭りは、国の重要無形文化財に指定されている。以前は毎年10月14日と15日に開催されていたが、現在は10月第3土曜日と翌日曜日に開催されている。

今年は10月17日と18日に開催されるので、17日に和恵夫婦と一緒に行ってきた。

川越市は娘婿になる堀田朋男君の出身地。今年の4月から始まったNHKの朝ドラ「つばさ」の舞台となり、すっかり有名になった。



朋男君の両親と昼食を食べる約束をしている場所に急いで行きたいのであるが、道は祭りの見物者で混雑してなかなか進めない。



西武新宿駅から10時発の特急列車小江戸に乗って本川越駅まで行く。妻は小平市の両親の家に泊まっており、花小金井駅から急行電車に乗って来ることになっている。本川越駅で合流する予定。



連雀町「道灌の山車」。江戸型と言われる山車(だし)は、豪華絢爛である。



約50分で本川越駅に到着する。川越市は既に祭りモードに入っている。駅前でも屋台の準備が進められていた。



山車には、笛1人、大太鼓1人、締太鼓2人、鉦(かね)1人の5人囃子(ばやし)に舞が付き、笛のリードで太鼓、鉦を打ち囃す。



蔵造りが並ぶ元町の一番街の「えぶろん亭」に着くと、堀田欣男さん夫妻が待っていてくれた。

まずは、川越の地ビール「COEDO」を御馳走になる。薩摩芋紅赤を原料にしているという紅赤(ペニアカ)は甘味があってなかなか美味しい。

料理は、この店の名物「川越散歩膳」という薩摩芋をふんだんに使ったもの。とても美味しかった。



薩摩芋料理の「えぶろん亭」の店の前



食事の後、川越まつり会館に案内していただいた。川越祭の歴史や仕組みが分かるように工夫され、いろいろなものが展示されている。

館内には、今年の祭りに参加しない幸町「小狐丸

の山車」と三久保町「頼光の山車」が展示されていた。川越には現在 29 台の山車があるが、今年の祭りに参加するのは 19 台ということであった。山車を組み立てたりする費用が 1 回当り 300 万円から 400 万円かかるので、どの町内会も毎年参加するのは経済的に難しいということであった。

製作途中の山車も展示されていた。これまでの制作費は 3600 万円。完成させるには後 9000 万円を要するという説明であった。

修理するには多額の費用がかかるが、費用の 8 割は国、県、市に負担してもらっているということであった。



今成の「鉦女(うずめ)の山車」。

祭りに参加している町内会の人達はとても親切。山車を引く綱の中に入れてくれて、カメラのシャッターも押してくれた。



ここが有名な「菓子屋横丁」。色とりどりのガラスが散りばめられた石畳の道に、22 軒の菓子屋・駄菓子屋がひしめいている。



「川越まつり会館」や「時の鐘」のある一番街(蔵造り)の通り。



川越には年間4百万人の観光客が訪れる。その観光スポットが、蔵づくりの街並みにひときわ高くそびえ、江戸時代を偲ぶ「時の鐘」である。今でも1日4回、「ゴーン」という音色を周辺に響かせている。

時の鐘は約370年前、川越城主酒井忠勝が創建。度重なる火災で焼失したが、鐘楼の再建や銅鐘の再鑄を繰り返し、現在のものは13代目に当たる。



釣鐘を打つのは、昔は約1時間おきであったが、今は午前6時、正午、午後3時、午後6時の4回になっている。運良く午後3時に通りかかったので鐘

の音を聞くことができた。

時間がくれば機械によって自動的に撞木(しゅもく)を動かして、鐘を突く仕掛けになっている。



幸町「翁の山車」。もとの南町のもの。県の文化財に指定されている山車だけあって華麗さは際立っていた。川越祭りを紹介した季刊「川越専科秋だより」を現地でいただいたが、その表紙には「翁の山車」の写真が飾られていた。



町内会の待機所ごとに櫓が組まれ、その上でお囃子などをやっていた。たまたま見かけた子供の翁の舞はとてもユーモアで面白かった。



市役所の前に山車が集合するというので見に行っただが、見物客で溢れていた。私のように背の低い者は写真を撮ることもできないので早々に退散し、由緒がありそうな喫茶店に入ってコーヒーを飲んだ。

上の写真は、本川越駅に向かう途中で撮影した今成の「細女(うずめ)の山車」。

浅草木馬亭

浅草の木馬館でやっている大衆演劇が面白いと聞いた。私が幼い頃に、田舎にもドサ回りがきており、国定忠治や清水次郎長などの演劇を観た記憶がある。

川越祭りから帰って家内の両親がいる小平市に泊まっていたので、電車を乗り継いで家内と一緒に浅草に行った。浅草には何度か行っているのも木馬館がどこにあるかは分かっていた。

着いたのは11時50分であった。劇場の入り口では出演する役者たちが客の呼び込みをしていた。開演の10分前であったので急いでチケットを購入すると、一人1500円と聞いていたのに2000円であった。開演前というのに観客がいないのも不思議であった。よく見ると、私がチケットを買ったのは木馬亭であり、同じ建物の隣が木馬館になっていたのである。

木馬亭では、「お笑い浅草21世紀」(橋達也座長)による喜劇『水澄む・浜松・秋日和』が上演されていた。呼び込みをしていたスタッフと話していると、岩佐圭二という役者は徳島出身で高知大学卒ということを知り、急に親近感を覚え木馬亭に入ることにした。

「お笑い浅草21世紀」の座長は、社団法人日本喜劇人協会の現在の会長。歴代会長にはエノケン、柳家金語楼、森繁久彌、曾我廼家明蝶、三木のり平、森光子、由利徹、大村崑などお笑い界の重鎮が名前を連ねている。



木馬亭の前。左端が徳島出身の岩佐圭二君。後から顔を出している役者の名前は分からないが、演技は非常に上手い。柴又の寅さん役は抜群。



木馬亭の隣が木馬館で紛らわしい



喜劇『水澄む・浜松・秋日和』的一幕。この喜劇は、静岡県の浜松が舞台になっていた。

左端の「寅さん」を演じている役者が、岩佐圭二君との記念写真に紛れ込んできた人。中央の男性が、「お笑い浅草21世紀」の座長の橋達也氏。

浅草は東京で一番好きな所であるが、さらに好きになった。ここに来ると50年前にタイムスリップしたような気持ちになりホッとす。心が癒される。